『語学教育研究論叢』第 37 号

佐々木ふさの文学にみるモダンガール
―憧れと情動―

青木　淳子

“Modern Girls” in the Literature of SASAKI Fusa:
Dreams and Emotions

AOKI Junko

Modernism arrived in Japan from the late Taisho to early Showa eras. Young women with progressive tastes who dressed in Western clothing were referred to as “modern girls.” In this article, the portrayal of a modern girl, “Sachiko,” the protagonist of the novel *Haru Asaku* (Spring, Shallowly) by SASAKI Fusa, who herself was called a modern girl, is discussed. I extracted keywords from the text, limiting my analysis to expressions about locations, Western items, fashion and emotions. Sachiko’s modern lifestyle includes living in the city but enjoying nature in the suburbs on her days off. The novel depicts her enjoying Western-style leisure activities, such as attending concerts and dining at hotels, as well as an intellectual side of her lifestyle, including being familiar with Western music and paintings, and even using English in her daily life. These are indeed modern tastes, but what really stands out is her independent attitude. She is cheerful and proactive in her outlook. She dresses fashionably, not to please men, but for herself. She has a certain superiority to men and thinks independently. As a modern girl, she looks to Western culture, and goes out because she is drawn to it. It can be said that this behavior is not constrained by anyone or anything and is a result of Sachiko trying to achieve an independent and free state of mind.

キーワード：モダンガール、モダニズム、ファッション、憧れ、情動、

1. はじめに：先行研究と目的

1.0　モダンガールとしての佐々木ふさ

大正末期から昭和初期にかけて、西洋文化の流入と雑誌などのメディアの発達により、モダニズムが世間を席巻した。そんななか、モダンガールと呼ばれる新しい女性像が表出する。一般にモダンガールとは、断髪・洋装・洋風化粧に表象[1]される。当時の評論家北澤秀一によって「自立を試みる近代的精神を持つ新しい女性像」[2]と定義された。当時そして後の時代にも、モダンガールと標榜された代表的な人物として、佐々木ふさ[3]があげられる。

1.1　先行研究

しかし、モダンガールとしての佐々木ふさを学術的に研究した論考は少ない。森まゆみは「大正快女列伝」の記事で「ささきふさ」が、望月百合子とともに「他に先がけて断髪洋装にし、銀座を闊歩した」と望月への取材を元に記している。この記事中ではふさの略歴、と作品について「大正末から昭和初期のモダンガール、高等遊民の生活が丸の内、銀座、浅草を舞台に活写」される、と少ない紙面の制約の中で概略と森の簡単な作品分析に止まっている[4]。

青木淳子は「モダンガールのファッション―大正末から昭和初期の洋装化の過程にみる」で当時の雑誌『婦人画報』1927 年 2 月号に掲載された、断髪洋装姿の佐々木房子の写真と記事をもとに、モダンガールとしての装いとその洋風趣味を指摘した[5]。さらに青木は「都市空間におけるモダンガール―ファッションを視点として」で他の吉行エイスケや伊藤整ら当時の男性作家のモダンガール記述との比較として、女性作家佐々木ふさの文学作品を一部例にあげ、ファッションという視点から読み解いた[6]。

佐々木ふさの文学作品を主なテーマとして学術的にとり上げた論考は 2 点ある。

水野真紀は「モダンガールの断髪と自我―ささきふさと「婦人グラフ」の東京モード」において、断髪と東京モードという視点で、ふさが執筆した『断髪』と当時の雑

---

[1] 中山千代（1988 年）『日本婦人洋装史』吉川弘文館 p386

[2] 北澤秀一（1924 年）「モダン・ガール」『女性』p226-237

[3] 佐々木ふさ（1897～1949 年）旧姓大橋房子。1925 年佐佐木茂索（文藝春秋社二代目社長）と結婚し、佐々木房子となる。ささきふさ。

[4] 森まゆみ（2002 年）「大正快女列伝 9 ささきふさ〈断髪のモダンガール〉」『本の話』2002 年 5 月号　株式会社文芸春秋 pp58-61

[5] 青木淳子（1999 年）「モダンガールのファッション―大正末から昭和初期の洋装化の過程にみる」『国際服飾学会誌』16 号　国際服飾学会 pp75-90、p80

[6] 青木淳子（2016 年）「都市空間におけるモダンガール―ファッションを視点として」『語学教育研究論叢』第 33 号　大東文化大学語学教育研究所　pp75-90

誌『婦人グラフ』に掲載された佐々木の記事を元に分析している。水野は、佐々木の漠然とした「懊悩」が物語テクストという枠組みを得ることで節分化され、「自我」と断髪の物語が生成されたのだろう[7]、と述べている。

そしてふさの文学作品を中心としたもう一つの論考として江黒清美の「ささきふさ「春浅く」と「ある対立」―モダニズムとフェミニズムの視点から」がある。江黒は「春浅く」にはヒロインの自我の目覚めとふさの男女平等論[8]、「ある対立」にはフェミニズムが描かれていると指摘[9]している。さらに「自分自身のスタンスを持った女の表象化を企図していたのではないだろうか」と述べ、女性作家としての再評価を望んでいる[10]。このように文学作品を資料とした先行研究では、主に佐々木の内面性について言及がなされている。

青木は先に述べた「都市空間におけるモダンガール－ファッションを視点として」の中で、佐々木の「春浅く」におけるファッション表現を中心に読み解いた。そこでは「脚」についての描写から女性の内面的な欲望を読み取ることができた。しかし、この論文では男性作家作品との比較において「春浅く」をファッションという視点を中心にとり上げるのみに止まった。

1.2　目的

本稿では佐々木の「春浅く」全編をファションという視点にとどまらず、さまざまな視点をもって新たに読み解くこととする。そしてそこにどのような「モダンガール像」が表出したのか？を考察する。そしてこの読み解きに際しては特に「憧れ」と「情動」という視点を持つ。

筆者は 2016 年度から 2018 年度科学研究費助成事業「「新しい女性」とアジアの近代―情動にみる思想・価値観の形成過程の比較研究」[11]に研究分担者として取り組んだ。20 世紀初頭、日本のみならず中国、韓国、インドネシア、トルコ、エジプトなどのアジアの地域において同時代的に表出した「新しい女性像」をテーマとした研究である。その討議の中で、新しい女性像表出のベースについて「情動」に加え、「憧れ」という視点でも語ることができるのではないか、と考えた。

---

[7] 水野真紀（2011 年）「モダンガールの断髪と自我―ささきふさと「婦人グラフ」の東京モード―」『東洋学研究』第 48 号　東洋学研究所　pp71-82、p78

[8] 江黒清美（2016 年）「ささきふさ「春浅く」と「ある対立」―モダニズムとフェミニズムの視点から」『昭和前期女性文学論』翰林書房　（pp81-96）pp86-90

[9] 江黒清美（2016 年）前掲論文 p86

[10] 江黒清美（2016 年）前掲論文 p95

[11] 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究基盤（c）研究年度：平成 28 年度～30 年度　研究課題番号：16K02003　研究課題名「新しい女性」とアジアの近代―情動にみる思想・価値感の形成過程の比較研究（研究代表者：山口みどり）

2. 資料と方法

2.1　資料：「春浅く」

「春浅く」は 1929 年 3 月の作品である。本研究では 1930 年に新潮社から出版されたささきふさの作品集である『豹の部屋』[12)]に所収されたものを資料とした。

主人公はさち子、17 歳の女子学生である。司書をしている比呂志と知り合い、デートを重ねる。母と二人暮らしだが、隣家に外交官に嫁いだ姉夫妻が子供二人と住んでいる。父は亡くなっているが後見人の伯父がおり、その紹介で十五歳年上の二上氏と見合いをする。他に登場人物は、比呂志の雇い主のイクス侯（ミロード）、英語教員のミス・ブライアン、逗子在住の鳴海夫妻である。

以下にあらすじを章に従い述べる。

[1 章]

主人公のさち子は青山の大学の付属高校の女学生である。校内の図書館に勤務する比呂志から創立記念の講演・園遊会への招待状を受け、友人の雪子と共に出かける。後日授業を「エスケープ」し、比呂志の運転する陪乗付オートバイで図書館に行き、ビアズリーの本を見せてもらう。

[2 章]

ある日、丸善で待ち合わせをし、さち子が注文していたビアズリーの本を、バイクで郊外に行き、一緒にみることにする。バイクを下り、スキー帽を脱いで髪を整えているさち子の耳に、比呂志は口づけをする。

[3 章]

比呂志は先の行為を反省する手紙をさち子へ出す。そこには当直している図書館に来て欲しい旨が書かれていた。さち子は行かないと返事をしたが、雨の中、会いに行った。比呂志はさち子が「僕にゆるぎのない自信を与えてくれた」と述べ、次の逢瀬に誘った。

[4 章]

さち子は、帝国ホテルでのクラシックの演奏会に母と姉に誘われる。伯父が仕組んだお見合いであった。お見合いの相手は 15 歳年上という所以外は非の打ち所の無い紳士の二上氏であった。休憩時間に偶然、比呂志と出会う。さち子は、お見合いに来ている事を比呂志に感づかれないか気にした。しかし又、家族に知られずに比呂志と会話できたことを痛快に思うのだった。演奏会で比呂志が、雇い主のイクス侯から依頼され、同伴していた外国人女性は、さち子の学校の寄宿舎に滞在しているアメリカ人で、さち子の英語の試験官でもあった。さち子とミス・ブライアンは試験後、英語

---

12) 本研究では、ささきふさ 1930 年 5 月『新興芸術派叢書　豹の部屋』新潮出版社の復刻版、ささきふさ著　関井光雄監修 2000 年『新興芸術派叢書　豹の部屋』ゆまに書房 pp26-92 を使用した。

で比呂志について語り合う。

［5 章］

さち子は逗子まで汽車で出かけた。途中、姉夫妻に誘われて行った関西旅行の事を思い出す。その旅行の目的が結局、海外に船で旅立つ二上氏の見送りであったことに不快感を持った。逗子駅には比呂志が迎えに来ており、二人は比呂志の友人の鳴海夫妻の家に行く。そこからビュイックに乗り 4 人で油壷までドライブする。鳴海夫妻を家まで送ったのちもさち子と比呂志はドライブを続ける。二人きりの時「縁談でもおこったんじゃない」と訊いた比呂志の「話」が途中であったが、それに答えるかわりに、さち子が比呂志に口づけをする。

2.2　方法：描写分類とキーワード抽出

「春浅く」の文中には、さまざまなモダニズム文学の特徴を見ることができる。先行研究でも、ふさのモダニズムは敢えていえば「大都市文化の表象」であると述べられている[13)]。筆者の分析でも、麹町、帝国ホテル、丸善といった都市の様相が明らかにできる。また、さらに都市だけでなくこの作品には、中野、高円寺、逗子、油壺といった当時の郊外へのドライブも描かれ、近代の中産階級の中でもアッパークラスの娯楽の一端をかい間見ることができる。

こうした場所という観点の他に、発表者はふさの作品の中に、モダンガールを表象する要素として、外来語・外国語・西洋事物、装い（ファッション）と身体、情動（言動、感情、感覚）という項目をあげる。そして、この要素に関連するキーワードを抽出した。要素と関連したキーワードと元の文章の該当する部分をまず［表 1：「春浅く」モダンガール関連要素とキーワード］にまとめた。表 1 は、物語順に、記したものである。次に、表 1 を元にそれぞれの要素別に分類した表 2 を作成した。便宜的に場所を a、外来語・外国語・西洋事物を b、装いと身体を c、情動を d とした。今回、特徴的と判断し抽出した個所は全部で 294。a は 8 件、b は 101 件、c は 44 件、d は 141 件であった。

本稿では、これら表に抽出した言葉を整理しながら、佐々木ふさの「春浅く」に表出したモダンガール像を分析する。なお、本稿では頁数の関係で、参考資料として末尾に表 1 と表 2 の冒頭のみを事例として掲げた。

[13)] 江黒清美（2016 年）前掲論文 p86　ここで江黒は小林洋介の区分によっている。［小林洋介（2013 年）『〈狂気〉と〈無意識〉のモダニズム戦間期文学の一断面』笠間書院］

3.「春浅く」に描かれた描写

3.1　場所：都市と郊外

さち子の自宅と学校について「麹町に生まれて育つて、青山の学校に通つてゐるだけのさち子だつた」（p39：表2：a3）と述べられている。つまり基本の場所は都会である。しかし、比呂志と付き合い始めてからのさち子の行動範囲は、物語が進むにつれて、拡張され、郊外へと拡がっていく。最初のデートは比呂志の勤務先である図書館であるが、次のデートは書店である丸善である。さち子は「丸善の階段をのぼりながら腕時計」（p39：a2）をみる。丸善では店員とも顔なじみである様子が描かれ、さち子の普段の行動範囲であることが判る。

しかし、丸善で購入した本を二人で読むために、バイクで出かける。「此処が何処の何町と、はつきり知ることは出来なかつた。ごみごみした町中を抜けると、いつかもう東京の外にでたらしく路辺に緑が加はり、道の先に現れるのは、馬や牛に牽かれた荷車ばかりになつた。」（p39：a4）と東京の街を抜けて郊外に出た時の様子が描かれている。

物語の終章である5章では、「汽車が鎌倉をでると」（p82：a5）と始まり、さち子はそこからさらに逗子に向かう。駅で待ち合わせた二人は、「午餐を摂るべく逗子ホテルのかぶさつた玄関」を入った（p87：a8）。さち子と比呂志のデートの場所から、日常は都会で過ごし、休日を郊外ですごすモダンライフの一面を見ることができる。

3.2　外来語・外国語・西洋事物

外来語、外国語、西洋事物に関する記述は、101件を抽出した。

まず、比呂志の雇用であるイクス候（ミロード）、勤務先のイグレク館を始めとして、さち子が招かれた園遊会の場面ではベンチ、ベランダ、サンドウヰッチ（p28：b10、12）と登場する。姉に連れて行かれた「帝国ホテル」では、ピアノの演奏会（p59：b38）が開催されており「アンコール」では演奏者が花束を受け取る。休憩時間にはグリルに行くことになり、空間について「ホテルのインダイレクトの光線は演芸場の内部では暗すぎる」（p60：b41、42）と間接照明について表現されている。演目について、プロコフィエフ[14]（p62：b48）、ワーグナー[15]（p68：b58）と、音楽家の名前が連なる。また、偶然出会った比呂志は「今日は英国大使館の人と、それから何処かのマドモアゼールと一緒（p64：b64）」とさち子に話す。また、最初のデートは図書館で、比呂志はビアズレー[16]の書物をさち子に見せる。（p30：b10）そして、次

[14] セルゲイ・セルゲーエヴィチ・プロコフィエフ（1891-1953）ロシアの作曲家、指揮者。ピアニスト。

[15] ヴィルヘルム・リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）ドイツの作曲家、指揮者。

[16] オーブリー・ビンセント・ビアズリー（1872-1893）イギリスの挿絵画家、詩人、小説家。

のデートは、さち子が丸善で注文していたビアズレーの『モート・ド・アーサー』[17]（p35：b13）を郊外で一緒に見ることとなる。

学校や家族と出かける先にこうした外来語、外国語で表現される西洋の事物がある、さち子と比呂志のモダンライフを読み取ることができる。

さらに作品中には、英文が組み込まれている。比呂志が帝国ホテルのコンサートにイクス候と同伴した「マドモアゼール」は、後にさち子の英語の試験教官として登場するミス・ブライアン（p81：b76）であった。試験後に、さち子とミス・ブライアンは比呂志について次のような会話を交わす。

“Do you remember a young gentleman who was with Marquis, last Saturday?”

“Mr. X introduced him to me, but I couldn’t get his name. What is he called?”（p81：b77）

小説中に英語がダイレクトに表記されることで、英語がさち子の日常の中に在ること、つまりさち子は英語が堪能で知的であることが判る。

また、こうした外来語、外国語、西洋事物の表記は、後に述べる装いや情動の項でも多数使用されている。外国語や西洋事情についての記述が多いことが、佐々木ふさの作品の特徴の一つだといえる。それが全編をモダンな印象に仕上げている。

3.3　装いと身体

ファッション、つまり装いや身体に関する特徴的な記述は、44 件を抽出した。

3.3.1　さち子の脚

さち子は 17 歳のまだ女学生である。はじめ「その日さち子は、赤筋の入つたいつもの短いセーラーのまま、雪子を誘いに出掛けて行つた」（p27：a1）といかにも女学生らしい装いで描かれている。しかし、次にこのような描写が続く。「が、靴下だけは薄い肉色の絹のにかへることを忘れなかつた。彼女は学校の定めの黒い木綿の靴下で包んでおくには惜しすぎる（ママ）美しい脚を持つてゐた。」（p27：b2）ちなみに小説中、さち子に関する表現で「女学生」という言葉は使用されてはいない。学校には通っていても、さち子は女学生ではなく、一人の女性として描かれているのではないだろうか。さち子が、学校の外ではこの「薄い肉色の絹の靴下」つまりストッキングに履き替えることが、それを表現している。

さち子の「脚」は、この物語においてさち子という存在の核心になっている。比呂志は「僕は女の帯つてものが大好きなの。五月が来ると、外へ出て帯を見るのが楽しみだ」（p32：c33）と、普段は洋装のさち子に、着物姿も好きだと語る。しかし「で

[17]『アーサー王の死』ビアズリーの著作。1893～94 年刊行。

も此脚を裾で隠してしまふのはもつたいないな」（p32：c34）と「脚」を褒めている。

比呂志に賛美されるだけではなく、さち子自身にとっても、脚は重要な自分自身のアイデンティティの拠所であると考えられる。それが推察できるのが、注文していた靴ができて、はいた時の、次の表現である。「さち子は弾力を秘めた側面の革が、やんはりと足の肉を締めるのを快く意識した。彼女は其処から這い上がつて来る仄かな動物的な匂ひをさへ、陶然と嗅いだ。いや、彼女は其処に切り出された彼女自身の脚の線を、何か他人のもののやうに、陶然と見てゐたのだつた。」（p55：c28）。革、足、肉、匂い、脚の線という装いを表すキーワードが続き、それを客体化して見つめるさち子の様子から、その足を他人（男）から見られることに価値があるのではなく、自分の所有物として客観的にみていると解釈できるのではないだろうか。つまり、モダンガールは、男のために装うのではなく、自分自身のために装うのである。

このことは、逗子から油壷へのドライブでの場面でも判る。「先んじてビュイックに乗り込む時、さち子はふと彼女の脚を見てゐるのが比呂志ばかりではないのに気付いて妙にぶるるとした。」（p89：c43）と、同行する鳴海氏の視線を否定するかのような表現がなされている。

3.3.2　唇

脚ともう一カ所、核心的に描かれているのが、口、および唇である。そして、それは口づけの場面である。

最初の口づけの場面は次のように描かれている。「「綺麗な耳」さち子は比呂志の息が左の耳一杯に熱くかかるのを意識した。次いで、蜜柑の一袋を挟んだときのやうな感触が、―さち子は瞬間髪のもつれも、頬のほてりも忘れて、比呂志をまともにきつと見返した」（p43：c17）。

丸善で買ったビアズリーの本を見るために、比呂志の運転するバイクの陪乗席に乗って、郊外まで来たさち子が、防塵のために比呂志からプレゼントされたスキー帽をぬいだ所であった。実はここでは、口や唇という言葉は出てはいない。しかし、さち子の耳は「蜜柑の一袋を挟んだときのやうな感触」に包まれる。比呂志が、さち子の耳に口づけした瞬間である。

そして最後の場面である。「さち子はふいに、向き直つた比呂志の口を、彼女自身の唇で緘（かん）した。」（p92：c44）はじめ比呂志からの耳への口づけをされ「きつと見返へした」さち子であったが、ビュイックでの逗子から油壷へのドライブの夕刻、今度はさち子から比呂志に口づけする。

受け身であったさち子が、男性との関係性において、能動的になったことを表している。

3.4　情動：言動・感情・感覚

さち子や比呂志を中心として言動、感情、感覚の表現で特徴的なものは 141 件であった。その中でも、さち子の感覚、感性について描かれた部分が、この物語に色彩を与えている。

3.4.1　さち子の快活さと魅力

さち子が快活で魅力的な女性として描かれている場面が多々ある。顔も知らない比呂志から届いた園遊会への招待を受けて出かける時「この小さな冒険の道連れに、一つ上の仲よしの、雪子を選んでしまつた」（p27：d1）と、これからの出来事を「冒険」と前向きに捉えている。そして、比呂志との最初のデートは「午後の音楽と体操をエスケープして、さち子は胸をわくわくさせながら、一人そつと校門を出た。」（p29：d3）と「エスケープ」と思い切った行動をとっており、それが「わくわく」すると描かれている。さち子は殆どの事をポジティブに受け止め、それを楽しむ気質であることが判る。そして比呂志がオートバイを用意したことを知り、彼と目があうと「幼友達にめぐり合つたやうな心やすい気持ちになつた。さち子は眼をそらす拍子に、思はず声を立てて笑ひだしてしまつた」（p30：d9）と、勇気が必要な行動を前に、声を立てて笑う。さらに丸善から郊外へと向かう事を相談している比呂志と一緒に「思わずあたりかまはぬ笑い声を立てた」（p39：d24）のである。

これらの記述から、さち子の快活で物事に対して積極的な性格が伝わってくる。

3.4.2　男性への優位性

さち子は、物語を通して、彼女自身の意識の中に徐々に男性への優位性を持ち始める。

比呂志に対して、最初のデートで「答へるより先に、彼女は黒いずぼんと歩調を合わせてゐた。」（p29：d6）と歩調を合わせるところから始まる。比呂志は西洋化、洗練されておりレディーファーストが身についている「比呂志は「さ、」と身を退いて、さち子を先にたてようとした。」（p32：d10）。このような比呂志の振舞いから、さち子も先だって行動することに抵抗を感じないようになったと考えさせられる。

二度目のデート、丸善での待ち合わせでは「さち子は先について待つよりは楽な気持ちだつたが、待たせたと意識するのもかなり重苦しかつた」（p35：d15）と、待つより、待たせることを選択したことが書かれている。そして丸善には比呂志だけでなく、他の男性の客も大勢いて、さち子は彼らを意識していたのだが、「今の今迄怖れぬいてゐた周囲の男達に、我等を見よとでもいひかねない公然さで、甘く比呂志に遅くなつた言訳をいつた」（p37：d20）と、比呂志との交際を経て、男性に対して強気になっていった。

15歳年上のお見合い相手の二上氏とのやりとりも、さち子の心持に変化を与えるものとなる。「二上氏は張り合いのないほど単純だつた。「ええ、僕は巴里に居る間、音楽会を追つかけてばかりゐたやうなものです。何しろ季節（セゾン）の間は…（後略）」(p70：d88)「一人でとめどなくしゃべり出した」(p70：d89)。このような態度を、比呂志とのやりとりもあわせて後に「男といふものは案外単純でのんきなものだな。自分のことだけしか考えてゐないものだな。」(p77：d104）と、思ってしまう。そして「とすると、疑惑の一点も感じさせることなしに男を裏切るのは雑作もないことだな。さち子はかつて経験したこともない批評的な気持ちで、そんな事を考えてゐた。」(p77：d105)。と述べられ、「彼女の口辺にはいつか、子供らしい彼女に似合はぬ悪魔的な微笑が漂うていた」(p77：d106）と、悪魔的と表現されている。

さち子はこうした「男」とのやりとりのうちに、交際の根源は自分にあることを自覚するようになる。二上氏の話を受けるかどうか、という場面で「落第の理由は、つまり、二上氏の方ではなく、彼女自身の中にあるわけだつた」と、述べられている。

さち子は、男を待つより待たせる、男は単純で裏切るのも雑作ないこと、そして交際するかどうかは、自分で決める、という物語を通して男性に対して自立した考え方を身につけていくのである。

3.5　憧れ：あくがれ

情動の項目で抽出した行動に、特徴的な出来事が3回ある。それは会話文で表されている。

最初のデートで比呂志がオートバイを裏道に停めておいた、それを見ての場面である。

「ぢや、何処かへ行つて一緒に見よう。」「何処へ行きませう。」「何処へでも。」「何処へでもつて、―」「また！」(p30：d7)

そして、次は、丸善で購入したビアズレーの書籍を一緒に見るために、バイクに乗って郊外へツーリングに出発する前の場面である。

「ぢや、何処かへ行つて一緒に見よう。」「何処へ行きませう。」「何処へでも。」「何処へでもつて、―」「また！」(p38：d23)

最後は、文字通り、この物語のラストシーンである。

「永遠の軌道」「帰るのがいやになつてしまつたわ。」「永遠の軌道」「これがこのまま人生だといいわね」(p91・92：d139)

佐々木ふさの作中には、外国語や西洋事物が溢れ、それはかつて、ふさが持っていた外国への憧れを表出しているのではないかと推察される。ふさは結婚前の大橋房子時代に、ローマで開催された第9回万国婦人参政権大会に参加[18]し、その年、フランスに滞在[19]した。ふさの西洋趣味の作風は、その体験が生かされていると推察する。

かつて憧れた西洋へのまなざしが、ふさの作品にあふれている。まさに「憧れ」が原動力となって、モダンガールが描きだされているといえるだろう。

しかし、発表者は、この作中にもう一つの「憧れ」が表出していることを指摘したい。『日本国語大辞典』によるとそもそも憧れの古語は「あくがれる（憧）」である。中世ごろから「あこがれる」と併用された。意味は居所を離れてさまよう。またあるものに心をひかれて、出かける[20]、である。

ふさが描いたモダンガールは、まさにこの「憧れ」に表出しているといえるだろう。

4.「憧れ」に表出したモダンガール像

モダンガールと標榜された佐々木ふさの作品『春浅く』に表現された内容を、場所、西洋事物、ファッション、情動という要素に絞り、キーワードをもとに文章を抽出することで、主人公さち子を通して、一つのモダンガール像を明らかにすることができた。

都会に住むが、休日は郊外で自然を楽しむモダンライフをすごす。演奏会やホテルでの食事など洋風の愉しみを持ち西洋の音楽や絵画に親しみ、日常生活でも英語を使い知的な一面をのぞかせる。まさにモダンな趣味である。しかし何よりも特徴的なのは、その自立の精神である。快活で物事に対しては積極的。おしゃれは、男のために装うのではなく、自分自身のために装う。男性への優位性を持ち、自立した考え方を持っている。モダンガールは、西洋を眼差し、西洋に心をひかれて出かける。それは、何者にも、何事にもとらわれない自立した自由な精神を目指した行為だといえるだろう。

佐々木ふさの小説のキーワードを抽出し詳細に分析すると、大橋房子としてパリに滞在した折に得た西洋文化の知識を、こうして帰国後の作品に反映させたことが判る。更に、感情という要素から分析すると、その作品は単に知識として止まらず体験を伴った「感覚」によって描かれた世界であることも明らかになった。この「春浅く」は 1928 年 3 月に執筆された。そして 1930 年に新潮社から「新興藝術派叢書」として出版された書籍『豹の部屋』に収録されている。中扉にはパーマネントをかけた断髪、洋装姿のふさの写真が掲載されている。額にはカールした髪がかかり、エレガントであるが、そのポーズは手を口元に置き、カメラをきりりと見据えた表情である。当時、

---

[18] 江黒清美（2016 年）前掲論文 p84 には「1923 年 5 月 14 日から 19 日にわたって」参加したことが明らかにされている。筆者も、東京朝日新聞、大阪朝日新聞を調査・確認した。調査にあたっては、東京大学社会情報学環付属社会情報研究資料センター、近藤瑞穂氏にご助力いただいた。

[19] 大屋典一（1956 年）『ささきふさ作品集』p345

[20] 小学館国語辞典編集部（2000 年）『日本国語大辞典』第二版 p200

断髪洋装に表象されたモダンガールの代表といわれた佐々木ふさの、この表情こそが、モダンガールの精神性を表していることが、その作品を詳細に読み解くことで、了解できるのである。

【本稿は 2018 年 10 月 28 日 「第 10 回　東西文化の融合」於：大東文化会館　主催：大東文化大学大学院　発表「佐々木ふさの文学におけるモダンガール―憧れと情動」に基づく】

【資料】

表 1：ささきふさ「春浅く」キーワード：表出順

箇所No	章	該当者	頁数	要素	分類	キーワード	表現
1	1	さち子	26	b	外国語	イクス・イグレク	イクス侯爵経営のイグレク図書館
2	1	比呂志	26	b	西洋事物	西洋人の学校	彼が彼女の通ってゐる西洋人の学校の男子部の出身であることと、
3	1	比呂志	26	b	外国語	イクス・イグレク	現在若いイクス侯の寵を受け、イグレク館の司書を勤めてゐること
4	1	さち子	27	d	言動	冒険	この小さな冒険の道連れに、一つ上の仲よしの、雪子を選んでしまつた
5	1	さち子	27	c	装い	短いセーラー服 靴下・肉色・絹・木綿の靴下・	その日さち子は、赤筋の入つたいつもの短いセーラーのまま、雪子を誘ひに出掛けて行つた。が、靴下だけは薄い肉色の絹のにかへることを忘れなかつた。彼女は学校の定めの黒い木綿の靴下で包んでおくには惜しすぎる美しい脚を持つてゐた
6	1	さち子	27	c	身体	肉色・足	その日さち子は、赤筋の入つたいつもの短いセーラーのまま、雪子を誘ひに出掛けて行つた。が、靴下だけは薄い肉色の絹のにかへることを忘れなかつた。彼女は学校の定めの黒い木綿の靴下で包んでおくには惜しすぎる美しい脚を持つてゐた
7	1	さち子	27	c	装い	流行雑誌 三越・松屋・モデル・映画女優	さち子はふと見た瞬間、流行雑誌の口絵を連想せずには居られなかつた。雪子はまさに、三越か松屋のモデルに雇はれた映画女優だつた。
8	1	雪子	27	c	身体	美しさ	見違へるほど美しくはあつたが、美しさそのものよりは、いつもの雪子でないといつた感じの方が先に、そして強くさち子の胸に来た。
9	1	さち子	27	d	言動	華やか・隠れる・慎ましい	さち子は華やかな雪子の影に隠れて、慎ましくベンチの一隅に座った

10	1	さち子	27	b	西洋事物	ベンチ	慎ましくベンチの一隅に座った
11	1	—	28	b	西洋事物	吹奏楽	講演がすむと、庭の芝生の向うで吹奏楽が奏された
12	1	—	28	b	外来語	ヴェランダ サンドウキッチ	芝生を見晴らしたヴェランダに、おすしやサンドウキッチの山が運び出された。
13	1	立像	28	c	装い	黒づくめ	黒い等身像は黒づくめの洋服を着た若い男の立像だつた
14	1	立像	28	c	身体	若い男・立像	黒い等身像は黒づくめの洋服を着た若い男の立像だつた
15	1	さち子	29	b	外来語	オレンヂ色	オレンヂ色の光で充たしてゐた。ほてつたさち子の頬に底冷えのする夕風が痛かつた。
16	1	さち子	29	d	感覚	痛かった	オレンヂ色の光で充たしてゐた。ほてつたさち子の頬に底冷えのする夕風が痛かつた。
17	1	さち子	29	b	外国語	エスケープ	午後の音楽と体操をエスケープして、さち子は胸をわくわくさせながら、一人そつと校門を出た。
18	1	さち子	29	d	感覚	わくわく	午後の音楽と体操をエスケープして、さち子は胸をわくわくさせながら、一人そつと校門を出た。
19	1	比呂志	29	c	装い	靴・ずぼん	黒い靴と黒いずぼんとが、俯向いた彼女の視野を切つて動いた。
20	1	比呂志	29	d	言動	切って動く	黒い靴と黒いずぼんとが、俯向いた彼女の視野を切つて動いた。
21	1	さち子	29	d	言動	歩調	答へるより先に、彼女は黒いずぼんと歩調を合わせてゐた。
22	1	比呂志	30	b	西洋事物	オートバイ	裏道には、陪乗の席をつけたオートバイが、溝に片寄せて置き捨てられてあつた。
23	1	比呂志	30	d	言動	何処へでも	「これで裏通りへ入つてしまへば、大丈夫、誰にも見附かりやしませんよ。」「でも、—何処へ行くの?」「何処でも。」「何処でもつて、—」
24	1	さち子	30	d	言動	何処へ	「これで裏通りへ入つてしまへば、大丈夫、誰にも見附かりやしませんよ。」「でも、—何処へ行くの?」「何処でも。」「何処でもつて、—」
25	1	さち子	30	d	感情	心やすい・笑いだす	幼友達にめぐり合つたやうな心やすい気持ちになつた。さち子は眼をそらす拍子に、思はず声を立てて笑ひだしてしまつた

26	1	さち子	30	b	西洋事物	ビアズレー	「ビアズレーを見せて下さる?」…「え、―はじめお手紙を見て、ビアズレーつて何だらうと思つたのよ。」
27	1	比呂志	30	b	西洋事物	サロメ	今書庫には『サロメ』だけしかないけど、とにかく行つてみない?
28	1	比呂志 さち子	31	b	西洋事物	オートバイ	二人を乗せたオートバイは、午後二時の人通りのない裏路を曲りまがつて、イグレク館のあの広い石段の下まで来た
29	1	比呂志	32	d	言動	身を退く	比呂志は「さ、」と身を退いて、さち子を先にたてようとした。

※この後 5 章 293 項目まで省略。

表 2：ささきふさ「春浅く」キーワード：要素別

	要素No	箇所No	章	該当者	頁数	要素	分類	キーワード	表現
1	1	39	2	さち子	33	a	場所	丸善	今日は丸善に寄つて行くの
2	2	40	2	さち子	25	a	場所	丸善	丸善の階段を音の立たぬやうにのぼりながら腕時計を見ると
3	3	56	2	さち子	39	a	場所	麹町 青山	麹町に生まれて育つて、青山の学校に通つてゐるだけのさち子だった
4	4	57	2	さち子	39	a	場所	東京	此処が何処の何町と、はっきり知ることは出来なかつた。ごみごみした町中を抜けると、いつかもう東京の外にでたらしく
5	5	244	5	さち子	82	a	場所	鎌倉・汽車	汽車が鎌倉を出ると、さち子は目立たぬやうに座を立つて、揺れる昇降口の戸に身を寄せた。
6	6	246	5	さち子	82	a	場所	イクス侯・別荘	比呂志のゐるイクス侯の別荘は、汽車の中から見えるといふことだつた。
7	7	257	5	―	85	a	場所	逗子停車場	午前十一時の逗子停車場
8	8	264	5	比呂志 さち子	87	a	場所	逗子ホテル	彼は彼女の否定のうちに、晴れ晴れとした笑顔の裏に、何か表にそぐはぬ影を認めてゐるらしかつた。…午餐をとるべく逗子ホテルのかぶさつた玄関を入つた
9	1	1	1	さち子	26	b	外国語	イクス・イグレク	イクス侯爵経営のイグレク図書館
10	2	2	1	比呂志	26	b	西洋事物	西洋人の学校	彼が彼女の通ってゐる西洋人の学校の男子部の出身であることと、
11	3	3	1	比呂志	26	b	外国語	イクス・イグレク	現在若いイクス侯の寵を受け、イグレク館の司書を勤めてゐること

12	4	10	1	さち子	27	b	西洋事物	ベンチ	慎ましくベンチの一隅に座った
13	5	11	1	—	28	b	西洋事物	吹奏楽	講演がすむと、庭の芝生の向うで吹奏楽が奏された
14	6	12	1	—	28	b	外来語	ヴェランダ サンドウキッチ	芝生を見晴らしたヴェランダに、おすしやサンドウキッチの山が運び出された。
15	7	15	1	さち子	29	b	外来語	オレンジ色	オレンヂ色の光で充たしてゐた。ほてつたさち子の頬に底冷えのする夕風が痛かつた。
16	8	17	1	さち子	29	b	外国語	エスケープ	午後の音楽と体操をエスケープして、さち子は胸をわくわくさせながら、一人そつと校門を出た。
17	9	22	1	比呂志	30	b	西洋事物	オートバイ	裏道には、陪乗の席をつけたオートバイが、溝に片寄せて置き捨てられてあつた。
18	10	26	1	さち子	30	b	西洋事物	ビアズレー	「ビアズレーを見せて下さる?」…「え、—はじめお手紙を見て、ビアズレーつて何だらうと思つたのよ。」
19	11	27	1	比呂志	30	b	西洋事物	サロメ	今書庫には『サロメ』だけしかないけど、とにかく行つてみない?
20	12	28	1	比呂志 さち子	31	b	西洋事物	オートバイ	二人を乗せたオートバイは、午後二時の人通りのない裏路を曲りまがつて、イグレク館のあの広い石段の下まで来た
21	13	44	2	さち子	35	b	外国語	カウンター モートドアーサー	カウンターの蔭から目の先にいつもの若い店員が蒼白い顔を出した。「先達ての『モート・ド・アーサー』今日お持ちになりますか?」
22	14	51	2	さち子 比呂志	38	b	西洋事物	ビアズレー・ モートドアーサー	「あててごらんなさい」…「お好きなものよ。」「ビアズレー?」「ええ、欲しがってらつしたでせう?」「『モート・ド・アーサー』?」「あたつたわ」
23	15	55	2	さち子 比呂志	39	b	西洋事物	オートバイ	それから彼等は駆けるやうに階段を降りきり、傍口に待たせてあつたオートバイの中に、重い本包と一緒に彼等自身をも投げ込んだ。
24	16	58	2	さち子	40	b	西洋事物	チョコレート	チョコレートの銀紙が大きな水玉のやうに光つていた
25	17	60	2	さち子 比呂志	41	b	西洋事物	スキー	「こいで帽子なの? 毒瓦斯除みたいね」「スキーの帽子さ。さつき丸善で君を待つてる間に買つといたの。」
26	18	66	2	さち子	43	b	西洋事物	スキー帽	彼女はのびのびと陪乗の椅子の中で座りなほして、肩までかぶさつてゐたスキー帽の端に手をかけた

※この後 d 92 の 293 項目まで省略。